

同性愛とアンガージュマンの相剋

——ピエール・エルバール『力線』——

森井 良

はじめに

ピエール・エルバールは、二十世紀フランスにおいて国際的な政治活動家、反体制のジャーナリスト、異端の文学者として暗躍した人物である。我々は別のところでこの日本では知られざる作家の「人と作品」を序論的に論じたが¹⁾、ここでは個別の作品を取り上げて、より局所的なテーマに迫ってみたい。すなわち 1958 年に刊行された『力線 *La Ligne de force*』における同性愛の様式と語りの問題である。

この作品はエルバールの^{メリタン}闘士としての遍歴が回想されたいわば私小説であり、「事件を嗅ぎつける生来の感覚²⁾」から同時代の〈大文字の歴史〉の現場に立ち会ってきた者ならでは、唯一無二の証言となっている。また、作家の政治参加の経験が色濃く反映された自伝的作品でありながら、そういった^{アンガージュマン}戦闘的態度と手を切り、政治的大義に対する本質的事柄の優位——「力線」＝「人生に意味を与えてくれる線」の定義——を結論として打ち出した反政治的のマニフェストでもある³⁾。「私は、二十年来、自分がどのようなメッセージを人類に届けることができるのか探求している。『メッセージ』という考えは、私の実存をひどく^{かたわ}片端にしてしまった。皆と同じく、私も Kommunismus から始めたのだ。これは急いで白状しておいたほうがいいだろうが、経験の成果は期待外れのものとなった⁴⁾」——冒頭からアンガージュマンへの疑義と反省が口にされているわけだが、じっさい各時代の騷擾の地——植民地時代のインドシナ、スターリン体制下のソヴィエト、内戦中のスペイン、占領下のフランス——を経めぐる本書において、「Communismus」の当時の本

坻地ソヴィエト連邦での冒険には多くのページが割かれている。職位を持つ党人としての活動、独裁を匂わす様々な事件、官吏たちの不気味な肖像など、否応なく公や政治的大義にかかる話題が並ぶなか、最も我々の目を引くのは、性愛がらみの一見些細な出来事であり、それらが上述の話題と同じ次元の「事件」として叙述されている点にほかならない。とりわけ語り手と「N」と呼称される現地の青年との恋愛のくだりは、自身の「快樂」や「私生活」は語らざしておくという当初の方針を逸脱した、きわめて個人的な経験と感情の吐露となっている。その営みは言論の自由や同性愛じたいを迫害する恐怖政治下の同性どうしの交際であるかぎりにおいて、政治と個人の生々しい争闘の場であることに変わりなく、またそのありようを綴るエクリチュールは、抑圧と検閲を前提とした「同性愛文学」のきわめて特異な実践となってもいよう。以上の文脈を踏まえつつ、エルバル作品のうちでも〈公〉と〈私〉の相互性とせめぎあい最も緊迫感をもって伝えられている作品の読解をとおして、この作家における同性愛とアンガージュマンの関係性の秘儀に迫っていきいたいと思う。

『力線』——同性愛者のアンガージュマン

若き日の植民地体験から共産黨員となり、親ソ連の知識人として内外の論壇にコミットし、第二次大戦中は対独抵抗運動に挺身、戦後は反俗のジャーナリストとして活躍したエルバルの人生は、文字どおり政治参加と文筆活動の往復からなるが、1940年代末からは後者の比重が大きくなり、とりわけ文学への回帰が顕著となる⁵⁾。『黄金時代 *L'Âge d'or*』(1953年)、『力線』(1958年)、『想像的記憶 *Les Souvenirs imaginaires*』(1968年)がその主な成果だが、いずれも彼が師であるアンドレ・ジッドを失って経済的・精神的苦境に陥っていた時期の所産であり、簡潔にして無駄のない率直な語りを持ち味とした回想録でありながら、時に虚実ないまぜの筆致で自らの人生を再創造しようする点において、自伝・小説・エッセイのどれにも還元しえない、「オートフィクション」の先駆的作品と見なすことができる⁶⁾。

なかでも『力線』は、後の論者たちが認めるように、ジャンルからの自由と形式の簡素さというこの作家の真髓を最もよく体现した作品であり⁷⁾、年

長の友人でもあったロジェ・マルタン・デュ・ガールに言わせれば、エルバール独特の感興そそる筆致と人となりをもそのままに伝えた「並外れて透明で光り輝く、鏡のような著作」ということになる⁸⁾。同性愛の表象にかんしては、恋愛遍歴の回想に特化した『黄金時代』には量的に劣るものの、第二章のソヴィエト紀行において成人男性の実体的な恋愛・性愛の営みが一種独特な形式で活写されており、エルバール研究のみならず（男性）同性愛文学研究の対象として取り上げられることも少なくない。

我々も第二章を後述の対象とすることになるが、ここではそれ以外の示唆的な箇所を見ておきたい。たとえば極東への旅が語られる第一章にも萌芽が散見される。1931年、語り手は著名な女性ジャーナリスト（アンドレ・ヴィオリス）の助手兼カメラマンとして仏領インドシナへの取材に同行する。スパイの車夫＝クーリーを逆に買収した彼は、その手引きでアヘン窟、娼家、賭博場といった現地の裏社会を経めぐるのであるが、とりわけ娼家のシーンには、植民地の性愛事情というだけでなく、語り手自身の性の様式が以下のように詳述されている。

クーリーが私を降ろした場所とは〔…〕、娼家だった。〔…〕女たちにかんしては、ありとあらゆる年齢と肌の色のがいたが、そんなことは言わずもがなだろうか？〔…〕女たち以外には、かなり洗練されたボーイが何人かいて、さまざまな用途に充てられた家畜がひととおり揃っていた。いまだ記憶にあるのは、小さな虎（赤ちゃん虎）がいたことで、そいつは一つの芸しか仕込まれていなかった——すなわちケースに入った木蓮の木陰で、客がじかに床で性交に耽っているあいだ、その部屋のなかを縦横に歩きまわるといふもの。〔…〕が、前にも別のところで言ったことだが、エロスにおける凝りすぎた中国趣味^{シノワズリ}には興奮めしてしまう。だからああいうムスメや、かわいこちゃんや、北京人や、でかいおっばいの艦隊水兵を見ても何の欲望も湧いてこなかった。むしろ哀れな小虎なら愛撫できたかもしれないが、それでもあの木蓮の木陰ではごめんだ⁹⁾。

女色と秘められた男色、自然嗜好、凝りすぎた趣味やわざとらしさを嫌う傾向、これらは『力線』における性の冒険の基調をなすものだが、そもそも

『黄金時代』のなかで彼のセクシュアリティの構成要素として規定されていたものでもあり、じじつ引用中の「別のところ」とは同作の冒頭にほかならない——「ピント合わせや、享樂のテクニックといったようなものは何であれ私をぞっとさせる。この分野にかんして、天啓を受けたのではない不自然なやり方を聞くと、私は悲しい気分になってしまう」¹⁰⁾。『黄金時代』では女色とその気づまり、不均衡な異性愛の後にくる対等な同性愛、駆け引きのないこの愛をとおした自己同一性の回復という道筋が示されていたが、『力線』においても、女性との快樂の内実は「私的な事柄に属すること」として深くは開示されず¹¹⁾、代わりに同性どうしの交際が前面に押し出されるふしがある。たとえば語り手の冒険につねに付き従う車夫＝クーリーとの付き合いがそうなのだが、その関係性は娼家のくだりの直後に次のように規定されている。

このクーリーとの付き合いでありがたかったのは、彼がこちらの発案をすべて聞き入れてくれたことだ。当初から、私は向こうの意図を見破っていた——彼は私になりたかったのだろう。私という代理をとおして楽しんでいたのだ。それがあったからこそ、食うにも事欠くような安い賃金——すなわち少しばかりの〔アヘンの〕燃え滓、数ピアストルの金や五グラムの〔アヘンの入った〕箱一つという見返りにもかかわらず〔…〕、昼も夜も私につきしたが、四つ辻という四つ辻で私をつねに待ち受け、ホテルの前で寝泊まりしてくれていた〔…〕。いわゆるよき僕である¹²⁾。

「私」と一体になり、利害関係から離れて享樂を共にするという関係の規定に、後の同性愛の様式がほの見える。エルバールのセクシュアリティのあり方を作品から析出したフィリップ・ベルティエによれば、この作家に特有の「同性愛的な同士愛 *compagnonnage homosexuel*」は、「特異性のなかに閉じ込められることの苦しみから免れさせるのではなく、それを分身と共有することで強固なものとする」絆であり、同質の分身的存在との交渉なき関係をとおして「自分のあいだ〔…〕、自分とともに、自分のうちにいつけるやり方」であるという¹³⁾。上述の車夫との関係は——性愛の要素がなく権力差を残した垂直の関係であるとはいえ——、その融合性と無償性にお

いてこうした「同士愛」と軸を一にするとところがあり、また階級の壁を越えて連帯の絆を結ぶ機縁となっている点において、『命令破棄』（1935年）や『アルキュオネ』（1945年）に見られた政治的同性愛の精神を多分に引き継いでいる¹⁴⁾。とりわけ後者の側面、「同性愛的な同士愛」が政治参加を条件づけるという趨勢は、アンガージュマンの否定を結論とする『力線』においてもなお垣間見られ、植民地・独裁国・戦地それぞれの抑圧的体制下の青少年たちへの語り手の共感的な眼差しと救助の振る舞いのうちに端的に表れているだろう¹⁵⁾。同性愛とアンガージュマンの相互性というテーマが否応なく惹き立てられてくるが、じじつ第三章において語り手はレジスタンスへの参加の理由を「思想」ではなく「自らの特殊な性癖」に帰しており（彼の抵抗運動の端緒は、ヴィシー体制下の青年錬成所の青年たちを対独強制労働から脱走させることであった¹⁶⁾、そこには理念やイデオロギーのみを動機としないエルバールのアンガージュマンの私的な倫理が賭けられている¹⁷⁾。

テロルのなかの性愛

第二章の舞台はスターリン体制下のソヴィエトである。伝記的事実によれば、エルバールは1935年11月に単身ソ連入りし、国際革命作家同盟の機関誌である『国際文学 *La Littérature internationale*』の仏語版編集長としてモスクワに滞在、1936年6月にはアンドレ・ジッドのソ連訪問を手引きし、国内各地をまわる旅に随行した。帰国後のジッドがスターリン体制への批判を含んだ『ソヴィエトからの帰還』をものすると、筆禍の予防のため内戦のさなかのスペインへ密使として赴き、翌年には同著をフォローする『ソヴィエトにて *En U. R. S. S.*』を上梓している。

シャルル・ダンジヤシルヴィ・パトロンが指摘するように、エルバールのソヴィエト紀行がジッドのそれよりも「文学的」で「小説的」というのは、伝記的事実に必ずしも添わないその虚構性もさることながら¹⁸⁾、政治的エッセイの趣が強い後者が取りこぼした日常的些事や私的領域の出来事への絶えざる注視がある所為でもあろう。じっさい『力線』の語り手は、巨大な「システム」のうちに溶け込みながら、公的な体験を重ねていく一方で、慣例にしたがわず巷間を練り歩き、そのことを次のように方針化している——「知

識人たちは、ソヴィエトに赴くと、まずはドネプロストロイ〔五カ年計画の工業化政策の一環として建設されたダム〕に飛びつき、作家同盟の会議に出席し、玉軸受工場の突撃作業班員たちと宴会をする〔…〕。かたや私はといえば、チューリップする少年と出会い、『ドゥラキーン将軍』〔セギュール夫人が1863年に発表した童話〕を買い求め、酔っ払いの死体につまずき、ジェットコエ・セロー行きの列車に乗りこむ。どれも取るに足らないことばかり¹⁹⁾。これら「取るに足らない」日常の小事は、作家である語り手にとって、政治や公にかかる有用な事業と同じ次元で語られるべき事柄であり、結局において「力線」の線上に置かれるべき「本質的なもの」であるわけだが、いま我々が注目したいのは、そこに性愛をめぐる事象も当然のごとく含まれてくるという事実にほかならない。

じっさい引用中の「チューリップする少年と〔の〕出会い」は、他のこの手の挿話と同じく艶笑譚のかつ告発的でありながら²⁰⁾、語り手自身のセクシュアリティを刺戟する「事件」であり、後の魅惑的な恋愛を予告するものでもあるだろう。ソヴィエト到着からまだ間もないころ、女友達と車で田舎を周遊していた語り手は、作業着姿の少年の集団が、取り巻きの大人たちと言いつ争っている場面に遭遇する。口論の渦中に混じっていった女友達が、皆に指弾されていた「美しい少年」と一悶着を起し、少年の「青い眼光が花の咲いたような頬にぱっとこぼれ落ちた」のを語り手が目撃した後、事の真相が次のように明かされる。

「つまりその、こういうわけなの。昨日彼らの村は祭日だったんだけど、あの少年たちは女の子とチューリップしたっていうのよ」

「チューリップするっていうのは」私はすばやく心の中で考えた。「カトレミアするのプロレタリア版にちがいない」

「つまりそれは禁止されているってこと？」私は驚いて訊いた。

「あたりまえじゃない！」女友達が大声をあげた。

そして私の驚きを前にして――

「しかも、あなたはあれが意味するところをまるでわかってない。彼らは女の子を騙し討ちして、まくったスカートの裾を頭のうえのところで紐で縛りあげてしまうのよ。可哀想な娘はもう抵抗できない。そしてその後……」

私は夢心地のままだった。たしかに、許しがたい。だけども……。この田園のあちこちに黒い作業服の少年とチューリップが植わっている、そう思うと風景が違って見えた。〔…〕

「イメージとして美しい」私は言った。

「詩人が言いそうなことね！」と女友達が言う。

「で、あそこに座っていた、あなたが話しかけていたあの少年は？」

女友達の胸がふたたび震えた。

「あいつが首謀者よ！」火がついたように叫んだ。「あいつがあれを……。他の子たちは見ていただけだって言ってるの」

今度ちょっとくらいひとりで散策でもしてみよう、そう私は決心した²¹⁾。

「カトレアする」とはマルセル・ブルーストが『失われた時を求めて』（「スワンの恋」）において「肉体的所有の行為」という意味でつかった隠語であるが²²⁾、そこに込められた嫉妬と潜在的な同性愛の主題を考え合わせると、ここでのエルバールの連想は意味深い。注目すべきは件の出来事を複数のレベルで両面的に提示した語り手が——滑稽な饗宴の営み、非難すべき集団強姦、純粋な詩的イメージとして——、最終的には禁欲的体制下での欲望の価値を肯定し、そこに自身のホモセクシュアルな欲望を響き合わせていることである。じじつその後には彼は、ホモエロティックな視線のもとに描かれる首謀者の少年の招きに呼応するかのように——「かの少年は〔…〕唇の端をゆがめて、こちらにかすかな微笑みと左目のウィンクを送ってきた²³⁾」——、新たな「散策」すなわちクルージュシグへと乗り出していくことになるのだが、そこで見出したのは「黄色い傘にすっぽり覆われた」都市のなかに息づく次のような真実であった——「いるのはラスコリニコフ〔ドストエフスキー『罪と罰』で金貸しの老婆を殺す青年〕ばかり、ぶつぶつ独り言を言いながら、行き来している。そのうちの一人の後をつけていくと、突然そいつが振り向いて両手でシャツの胸元をぱっと開け、裸の胸に下がっている十字架を見せてきた」²⁴⁾。

当時のソ連はスターリン主導のもと宗教弾圧が強まり、同時に非規範的な性のあり方への抑圧が再開された時期であり——中絶や男性同性愛を罰する法律が制定されたばかりであり、これらはジッドとともにエルバールの危惧

する主要な点であった²⁵⁾——、いみじくもエルバールの滞在は「大粛清」と呼び習わされるこのテロルの時代と重なっている。しかしそんななか彼が実際の社会で出くわしたのは、まさしく非順応主義的な人々、密かに性愛に興じて欲望を解放させる少年や、殺気を放ちながら胸に信仰の印を隠しもつ青年であった。こうした若き「反逆者」は、ドストエフスキーの登場人物にもなぞられているように、エルバールにとっては文学的対象であり、その作品中でも馴染みのフェティッシュな人物像にほかならないが、他方で彼らをとおしてスターリン体制の欺瞞が間接的に批判されている点にも目を向けなければならない。「ネバ川にかかる重ったるい霧が、欄干のところまでたちこめているのがわかった。これが社会主義の祖国なのだろうか？ 格別の感動はない。これが私の祖国、やっと見つけ出した、認めがたき祖国だった」²⁶⁾。こうした直後の述懐からわかるとおり、一連のシークエンスでは性的に惹かれる反抗的な若者の外観に隠された内実——「チューリップ」という符牒や「シャツ」の装いのうちに秘められた欲望と信仰——と「重ったるい霧」の奥処にひそむ「社会主義の祖国」の実像とが重ね合わされている。こうした意図的な二重化のうちにも、先述した〈個人的なもの〉と〈政治的なもの〉の葛藤、ひいては同性愛とアンガージュマンの相即性がうかがえるのであり、やがて語り手はこのせめぎあいの逐一をある青年との恋愛をつうじて身をもって経験することになるのである。

「N」との恋愛、あるいは中性的エクリチュール

見てきたように『力線』の行動と語りには日常的・私的なものへの眼差しが基底にあるわけだが、それは他者だけでなく、語り手自身にも向けられてくる。つまりは彼自身にも「事件」となるべき出会いが訪れるのであり、それ以降、当初のプラン——「安心せられよ——かの地で味わったさまざまな快樂については、ここではおくびにも出さないつもりだ。本書が私から引き出すべきものは、具体的で、いわば社会的な経験のイデオロギー的上部構造にほかならないということをおぼろげに忘れないでおこう」²⁷⁾——を大きく逸脱した、きわめて個人的かつ実存的な部分が披歴されていく。

まずは経緯を述べていこう。編集部での「検閲官たち」との戦いに疲れ、

コミンテルンにもマークされてしまった語り手は、直属の上司（ミハイル・コルツォフ）からクリミアへの三週間の旅を勧められる——「そこに若手研究者のための保養所があるんです。〔…〕あなたにとってはいい気分転換になるでしょう。私にお任せください、行けば虜とりこになりますよ」²⁸⁾。これは被疑者を首府からいったん離して身の安全を確保させようといういわば権力の中二階からの計らいであり、同時にエルバールの性的指向を知ったうえでの不吉な歓待の誘いでもありうるわけだが²⁹⁾、いずれにせよ訪れたクリミアの地で語り手は思いがけぬ出会いに逢着することになる。

私は大きな不安を抱えたままモスクワを離れた。私の予感が間違ふことはめったにない。何らかの災厄を予想していた。

恋がやってきたのだ。「若手研究者たち」の保養所で、ひとの人生をすっかり空にしてしまうような存在エートルと出会い、これによって自分が遠くへ導かれるであろうことがわかった。〔…〕

Nは二十歳で、モスクワの科学研究所の一つで研究をつづけていた。〔…〕黒海のほとりで過ごしたNとの三週間は、私の人生において、慌ただしく虚しい十年の月日を埋め合わせてくれる、楽園のような休息のひとつとなった。〔…〕けれど私の腕のなかで眠るNを見て、子供っぽいその顔の表情、肩にかかってくるその頭の重み、このうえなく優しい抱擁の後の、あどけなく身をあずけて休らうその姿に接すると、なぜだか根拠のない不安に胸を塞がれそうになったのだ。ああ！ 私をとおして、この存在に何も悪いことが起きませんように！ 私の狂気からまもられますように、その体の無垢な状態のうちにとどまりますように³⁰⁾ ……

ここで「存在」ないし「N」と呼称されているのは、やがて語り手と愛情関係を結ぶことになる大学生の青年にほかならない。まず注目すべきは、その最初の言及である上の引用中に、すでにしてエルバールの同性愛の様式、さらには『力線』に固有の同性愛表現が現れている点である。ひとつは「災厄」としての同性愛、『黄金時代』や『階段』（1957年）といった作品群に繰り返し描かれてきた恋愛の成り行きであり、具体的には「情熱」と「嫉妬」のあまり疑心暗鬼から相手を「破壊」してしまう自身の傾向とその悲劇的結末

を指す³¹⁾。この「災厄」というのは、後の論者やエルバール自身も注釈しているとおり、同性愛を「罪」や「悪徳」と見なす当時一般のだった思潮に根ざすものでは決してなく³²⁾、あくまで個人的な、彼自身の性格と内なる「狂気」に由来しており、じっさいそれは他方の「幸福な愛」としての同性愛という真逆の様式と分かちがたく結びついている³³⁾。『黄金時代』をはじめとするエルバールの同性愛文学には、同性愛じたいを抑圧する審級もなければ当事者を苛む内的／外的葛藤すらなく、そうしたタブーの意識の欠如こそが同時代の読み手の評価のポイントになっていたが³⁴⁾、ただソ連を舞台とした『力線』だけは例外といわねばなるまい。というのはスターリン体制という否応ない外部からの迫害と身の保全の必要性がそこでの同性愛表現——行為と語り——の前提とならざるをえないからである。

引用中の「根拠のない不安」にはその暗示も含まれていると思われるが、次に注目したいのは、そうした危機的状況が件のアリバイ的呼称を要請している点にほかならない。一足先にモスクワへ帰った「N」から研修のため二週間会えないという知らせを受けとった語り手は、即座にその滞在先のキエフへ発つ決断をし、プラットホームでの次のような再会に臨む。

Nがそこの、ホームに立っている、が、こちらには気づいていない。たちまち、こんな誘惑に駆られる——このまま列車の出発の時間まで身を隠し、何もなかったことにしたらどうだろう。[……] 幻滅というのではなく[……]、これからこの存在の魂を少しく汚していくのだと自分でよくわかっているだけに、不意の憐れみを覚えてしまうのだ。その姿を見ただけで、いいしれぬ怒りが心のうちに湧きあがってくる。なんだ、あいつはたったひとりで、独り立ちして存在しているじゃないか。駅のホームをほっつき歩きながら、むろん私を待っているのだろうが、傍に行っていないものか？

Nがこちらに歩み寄ってくる、夢見る子供のような笑みを浮かべ、透きとおるような顔をして。

「どうしてキエフに立ち寄ったの？」

自分の顔が怒りで青ざめていくのがわかった。私が「キエフに立ち寄った」だと？ 私はキエフに来たのだ³⁵⁾。

すでに懸念していたような「狂気」が滲み出ているが、それよりも注目すべきは、恋人の若い男性が相変わらず「N」というイニシャル、「存在 être」「子供 enfant」といった男女同形の名詞で指示されていることである。つまり語り手は恋人の性別を曖昧にしたまま「この存在」との情事を語るのであり、いわばイニシャルという暗号を使うこと以上のアリバイ的処置を二人の関係に施している。明らかな検閲避けだが、これはドミニク・フェルナンデスのいう「同性愛文化」——「同性愛を隠蔽したり間接的な手段で描いたりしなければならないために、やむなく作家が暗示的な言語を創造するときにはか」成立しない「文化」——の表徴として銘記すべきものであろう³⁶⁾。じっさい二十世紀の男性同性愛文学を研究するパトリック・デュビュイは、こうした抑圧による新たなエクリチュールの創出を検討するなかで、エルバールを「隠蔽と不決定の技法がもたらす可能性の偉大なる開拓者」と見なし、件の『力線』のエクリチュールを「愛する者のことを女性形・男性形を一切使わずに喚起するという文法上の壮挙」と讃えたうえで、作家が「一種の中性」を発明したと指摘している³⁷⁾。実際のエルバールの文章を見ると、たしかに三人称男性単数の代名詞である«il»が使われているものの、「この存在 cet être」を受けているにすぎず、厳密には「N」の生物学的性と一致しているわけではない。また、性数一致を起こさせないために「この存在」の台詞には属詞を導く^{コピュラ}繫合動詞としての«être»が周到に省かれている。

こうしたアクロバティックな「技法」が最終ページまで続けられている点において、エルバールの「同性愛文化」および同性愛文学への寄与が計られるのは慶賀すべきことだが、我々としては措置としての重要性をいま一度強調しておきたい。件の暗号化・中性化が、エルバールの自己保身というよりは、物語世界外、つまり本書執筆の時点（1958年）においてなおソ連で生活しているであろう「N」の身柄を守るための実際的方策であることを忘れないようにしよう。同性愛を罰する法律はスターリンの死後も生きており、また共産党を離党しソ連批判をものする裏切り者＝エルバールと通じていたとして、訴追される可能性もあるからである。じっさい作中のエルバールは友人のユダヤ系作家（イサーク・バーベル）から、「西洋帝国主義の手先」として「生贄」にされる恐れがあること、そしてジッドと同じく「弱み」を握られていること——「あなた自身だって、青年を墮落させた罪〔＝男性同性愛〕で告

発される可能性がないとはいえない³⁸⁾」——を指摘され、帰国の強い勧めとともに、次のような忠告を与えられている——「この地で誰か愛しているひとがいないんですか？ 可愛がっている特別な存在がまったくいないというんですか？ […] 人質を残していっちゃ駄目ですよ、エルバル。これはあなたがまだ回避できる唯一のことです」³⁹⁾。この忠告は、当局がエルバルの性的指向のみならず、「N」との関係をも知悉していることをほのめかしており、さらにバーベルがソ連におけるユダヤ人コミュニティのなかでコルツォフと通じていたことを思い起こせば⁴⁰⁾、クリミア旅行が仕組まれた旅であった可能性まで惹起して、恐ろしい。

絆を絶えず、事情を打ち明けることもできない彼は、交際を続けたまま恋人を「人質」にしないために「用心」と「秘密」を重ね⁴¹⁾、何人かの協力者の手引きで抜け道を進むことになるが、帰国後、ついに決定的な措置を取らざるをえなくなる——「さらなる責め苦が私を待ち受けていた。Nが手紙を書いてきたのだ。 […] 私とはといえば、返事を出せなかった——ごく短い通知であっても、Nの自由を、おそらくは命を奪いかねなかったからだ」⁴²⁾。ここまでの措置が作中主体としてのエルバルの施すものだとすれば、件の暗号的・中性的エクリチュールは本当の意味での最終的な措置、しかも今度は語り手ないし作家個人としてのエルバルの施すものといえるだろう。その意味で彼の同性愛表現はフィクショナルな回想録における自伝契約——作中主体＝語り手＝エルバルの同一性——の更新をなすのであり、文字どおり愛する他者の「命」と自らの自己同一性の賭けられた実存的エクリチュールの実践そのものなのである。

結論に代えて

以上、エルバルの『力線』における同性愛の主題を、内在的読解と他作品との関連をつうじて、内容と語りの両次元で論じてきた。我々は別稿でエルバルの実人生と作品世界における同性愛の位置づけを概観したが、そこで仮説として提示した〈私〉と〈公〉の双方の圏域を確立／結合する同性愛の機能が、今回より具体的なかたちで明らかになったことであろう。

ところで「N」についての言及は、前掲の手紙だけで切れるわけではない。

その後、内戦下のスペインへ赴いた際にも主人公は「Nのことを想って」身に迫る恐怖を打ち消し⁴³⁾、かたや第二次大戦前夜のアフリカ再訪に触れる際にはこうつぶやいている——「私はすでに共産党をやめていた。私は自由で、軽く、空虚だった。Nの面影はぼやけていた。あるのは苦々しい、満たされぬ思いだけだった」⁴⁴⁾。ここで政治の季節の終わりと「Nの面影」の消滅が同期しているのは、同性愛とアンガージュマンの相互性の証左として見逃せない。「N」との恋愛はかようにエルバルルの政治遍歴と結びついていたのであり、だからこそ『黄金時代』ではなく『力線』に組み込まれる挿話となったわけだが、それでも〈私〉と〈公〉を引き離す最終的結論のなかで語り手は「もし明日自分にそうするだけの力があつたなら、愛する存在への愛がその代償であつたとしたら、軽やかな心で世界のことなどうっちゃってしまおう」と断言している⁴⁵⁾。「愛する女」と区別された「愛する存在」とは、すでに見たように「N」を指すもう一つの符牒であり、「世界」より「愛する存在への愛」を優先するという条件法のもとで言われた宣言は、それができなかった過去、すなわち「N」との離別への悔恨にほかならない。この後の「力線」の定義において同性愛は政治的大義（＝「敗北線」）と対立する「本質的なもの」にはっきりと組み込まれず濁されているが⁴⁶⁾、かえってそのことが「政治的なもの」に対するホモセクシュアリティの両義的な地位を示唆している。つまりは相互性と対立であり、両者の関係性は、彼の同性愛的じたいのうちにも見られるような、切り結びながら惹きつけ合うそれを用いのである。

注

- 1) 「ピエール・エルバルル、その作品とゲイ文学としての位置づけ」、『フランス文化研究』54号、獨協大学フランス語学科、2023年、17-18頁。
- 2) Herbart, *La Ligne de force*, Gallimard, coll. « L'Imaginaire », 2011, p. 52. 以下、*LF*と略記する。
- 3) *Ibid.*, pp. 151-154.
- 4) *Ibid.*, p. 11.
- 5) エルバルルの伝記的記述についてはジャン＝リュック・モローの伝記 (Jean-Luc Moreau, *Pierre Herbart : l'orgueil du dépouillement*, Grasset, 2014)

を参照した。

- 6) Paul Renard, « La revue littéraire de Pierre Herbart : “Escorte” et “ligne de force” », in *ROMAN 20-50*, hors série n° 3, Presses Universitaires du Septentrion, décembre 2006, p. 5 ; Marc Dambre, « Une bonne situation », *ibid.*, pp. 13-14 ; Bruno Curatolo, « *Souvenirs imaginaires : Le mentir-vrai de Pierre Herbart* », *ibid.*, pp. 73-74.
- 7) Dambre, « Une bonne situation », *ibid.*, p. 13. また、同時代の読者でもあった作家のドミニク・フェルナンデスは、同性愛が「方法のストイックな節制をもって」語られた『力線』を「古典主義の完璧さを備えた物語」と評している (Dominique Fernandez, « Une élégance désespérée (Pierre Herbart) », dans *Amants d'Apollon : l'homosexualité dans la culture*, Grasset, 2015, pp. 456-457)。
- 8) Lettre de Roger Martin du Gard à Jean Denoël, citée dans Moreau, *op. cit.*, pp. 524-525.
- 9) *LF*, pp. 31-32.
- 10) Herbart, *L'Âge d'or*, Gallimard, coll. « Le Cabinet des Lettrés », 2001, p. 13.
- 11) たとえば娼家を出た先で邂逅した「マレー人の女」との情事を語る際がそうである。「つづきはまぎれもなく私の私生活に属することなので、ここでは詳らかにしないでおこう」(*LF*, p. 34)。
- 12) *Ibid.*, pp. 34-35.
- 13) Philippe Berthier, *Pierre Herbart, morale et style de la désinvolture*, Centre d'études gidiennes, 1998, pp. 41-42.
- 14) Cf. 「ピエール・エルバール, その作品とゲイ文学としての位置づけ」, 23-27 頁。
- 15) インドシナの監獄を訪れた語り手は、そこに「反乱分子」として鎖に繋がれた「十二歳クラークぐらいの少年」を発見し、機転をベスフリスゾルニキきかせて逃している (*LF*, p. 45)。ソ連では富農撲滅運動で路頭に迷った「浮浪児たち」に施しをし、彼らを擁護する姿勢を随所で見せており (pp. 71-72, pp. 84-85, pp. 91-92)。内戦渦中のスペインでは、バリケードの壁越しに「同じ歌」を口ずさみあう敵味方の少年兵たちに同情の眼差しを送っている (pp. 131-132)。
- 16) Cf. *LF*, p. 141 ; Moreau, *op. cit.*, pp. 338-340.
- 17) Cf. Berthier, *op. cit.*, pp. 68-69.
- 18) Charles Dantzig, *Dictionnaire égoïste de la littérature française*, Grasset, « Le Livre de Poche », 2009, p. 443 ; Sylvie Patron, « Pierre Herbart ou la vie ironique », in *Critique*, n° 624, Éditions de Minuit, mai 1999, pp. 425-428.
- 19) *LF*, pp. 67-68.
- 20) たとえば滞在先の別荘の「乳母」(*ibid.*, pp. 61-62)、売春する浮浪児の少女 (pp. 93-94)、中国人のマッサージ師との絡みを参照 (pp. 37-39)。
- 21) *Ibid.*, pp. 63-64.

- 22) オデットが胴衣に挿していたカトレアの傾きをスワンが直したことから二人の肉体関係が始まったために、「カトレアする *faire catleya*」は「肉体所有の行為を言い表そうとするとときに何の考えもなしに用いる単なる用語」となった (Marcel Proust, *Du côté de chez Swann, dans À la recherche du temps perdu*, tome I, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1987, p. 230)。
- 23) *LF*, p. 63.
- 24) *Ibid.*, pp. 64-65.
- 25) ジッドは『ソヴィエトからの帰還』において「階層の差」が開きはじめたソ連に「保守的」でフランスの「プチ・ブルジョワジー」と酷似した階級が形成されることを危惧しているが、そうした傾向の予兆として、1936年当時布告されたばかりの中絶禁止法と、二年前にソ連法に組み込まれた反ソドミー法を挙げている。「同性愛者に対しての […] 法については、マルクス主義の観点から見て、いったいどう考えたらいいのか？ それは同性愛者を反革命者と同一視し、五年の流刑に処すというもので（というのも非順応主義は性的な問題においても訴追されるから）、しかも追放によって改心することがなければ刑が更新されるのである」 (*Retour de l'U. R. S. S., dans Souvenirs et voyages*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2001, p. 772)。ソ連渡航直前にエルバルはジッドとこうした「ソヴィエトの同性愛に対する態度」について「議論」を交わしていた (Moreau, *op. cit.*, p. 184)。
- 26) *LF*, p. 65.
- 27) *Ibid.*, p. 13.
- 28) *Ibid.*, p. 99.
- 29) これ以前の、ある青年との引き合わせを提案するコルツォフの台詞のうちにすでに含みがある。「あなたに紹介したい友人が一人います、ルミヤンチェフという、非常に将来を嘱望されている青年です。彼はいま、クレムリンのサナトリウムで休養しているところです。いつか午後にもあなたを迎えにまいります。いずれわかるでしょうが、それはそれは素晴らしいですよ、サナトリウムが、という意味ですがね」 (*ibid.*, p. 83)。
- 30) *Ibid.*, pp. 100-101.
- 31) *L'Âge d'or*, pp. 111-112 ; *L'Escalier* [1957], dans les *Histoires confidentielles*, Grasset, coll. « Les Cahiers Rouges », 2014, pp. 107-108.
- 32) モローが参照する『黄金時代』の初稿によれば、エルバルは「ソドミー」や「売春」に混同される「悪の同性愛」を否定し、さらにブルーストやジャン・ジュネに代表される同性愛を「悪徳」と見なす傾向を批判したうえで、自身の同性愛をその対極に置いている (Moreau, *op. cit.*, pp. 488-489)。
- 33) 「N」との最後の夜、二人の交際は次のように総括されている。「私はNに添うようにそっと寝そべり、両腕でその体を抱きしめた。 […] こうしていられ

るのがたとえ一時間でも、五分でも、一分でも、幸福 *le bonheur* なのだ」(LF, p. 122)

- 34) たとえばミシェル・トゥルニエの書評と、当時の読書体験からエルバール作品を称揚するフェルナンデスの批評が挙げられる。Michel Tournier, « Pierre Herbart, *L'Âge d'or* » (« La Rubrique du mois »), in *La Table Ronde*, n° 70, octobre 1953, Plon, pp. 149-150 ; Fernandez, « Une élégance désespérée (Pierre Herbart) », *op. cit.*, p.451.
- 35) LF, p. 103.
- 36) Fernandez, *Le Rapt de Ganymède*, Grasset, 1989, p. 233.
- 37) Patrick Dubuis, *Émergence de l'homosexualité dans la littérature française d'André Gide à Jean Genet*, L'Harmattan, 2011, p. 241, p. 254.
- 38) LF, p. 107.
- 39) *Idem.*
- 40) *Ibid.*, p. 81.
- 41) *Ibid.*, p. 118.
- 42) *Ibid.*, p. 125.
- 43) *Ibid.*, p. 133.
- 44) *Ibid.*, p. 139.
- 45) *Ibid.*, p. 151.
- 46) *Ibid.*, p. 154. 『力線』の結論と同性愛との連関については、拙稿を参照。「ピエール・エルバール、その作品とゲイ文学としての位置づけ」, 29-32 頁。